

## 朝日新聞 2016年6月6日朝刊 2面記事から

2010年ハンガリー 中道右派「フィデス・ハンガリー市民連合」が大勝した事で議席の3分の2を獲得。このことから何がハンガリーで起きたかを記している。

### 新たな憲法 個人より共同体

ハンガリーの首都ブダペスト。中央を流れるドナウの河畔にあって、ひととき威光を放っているのが、築110年を超える国会議事堂だ。ここに、厳重に保管されているものがある。「聖なる王冠」。王国時代からの権力の象徴だ。2012年に施行された新憲法の前文にあたる「民族の信条」には、この王冠が登場する。「我々は・・・民族の統合を体現している聖なる王冠に敬意を払う」

オルバン・ビクトル党首 率いるフィデスは10年、当時与党だった社会党への不信票をとりこみ、386議席のうち263議席を獲得、政権を奪還した。これを「投票所革命」と位置づけ、憲法の部分改正を10回以上繰り返し、並行してまったく新しい憲法を制定した。新たに憲法に盛り込まれた規定からは、個人の権利より民族や共同体を重くみる思想が浮かび上がる。

▼個人の自由は、他者との共同においてのみ、展開できると信ずる

▼我々の共生の最も重要な枠組みが家族及び民族

▼何人も・・・その能力及び可能性に応じた労働の遂行により、共同体の成長に貢献する義務を負う

狙いは何か。第1次オルバン政権(98~02年)で報道官を務めた、週刊誌編集長のポロカイ・ガーボルさん(54)は言う。

「経済危機が深刻化する中で、働いて国家に尽くすよう国民の価値観を変えようとした」

憲法学者のマイティーニ・バラージュさん(41)は「民族主義的な主張は、政権が権力を強めるための一つの手段」とみる。

「民族や共同体を強調することで、敵/味方という分断を社会に持ち込んだ。難民排斥の動きはその一例だ」

昨年夏、難民の入国を阻むため、オルバン政権が国境にフェンスを次々と作ったことは記憶に新しい。欧州連合(EU)諸国との協力を拒み、強権的な政治姿勢を象徴する出来事だった。

### 憲法裁判所の人事も介入

政権の対決型政治スタイルは、新憲法の制定過程でも発揮された。

新憲法の案が国会に提出されたのは11年3月。わずか9日間の審議で1カ月後に成立させた。

賛成 262 票、反対 44 票、棄権 79 票。

「3 分の 2」の威力を見せつけた。

社会党の国会議員、バーランディ・ゲルゲイさん (39) は「新憲法をつくること自体には反対ではなかったが、与党は全く聞く耳を持たず、合意を取ろうとしなかった」と振り返る。

政権はチェック機関である憲法裁判所も政治のコントロール下に置こうと、人事にも手をつけはじめた。

野党抜きでも憲法裁判所の裁判官を任命できるよう憲法を変え、予算や税、財政に関する法律を裁判所の審査の対象から外してしまった。

「違憲の法律の憲法化」という状況も生まれた。

憲法裁判所が家庭や宗教に関する法律の規定を「憲法違反」と判断すると、これに反発した政権は 13 年、法律ではなく憲法の方を改正し、違憲の規定を憲法に書きこんだ。さらに新憲法が施行される前の憲法裁判所の裁判の効力は失われる、と明記した。

元大統領で、90～98 年に憲法裁判所長官を務めたショーヨム・ラースローさんは言う。

「憲法裁判所の果たしてきた役割を台無しにするものだ。1 人の人間に権力が集中し、立憲主義とは呼べない状況が生まれている」

## 「バランスを欠く」メディアに罰金

メディアを規制する独立機関の再編や公共放送職員の大幅リストラなど、オルバン政権は次々にメディアへの介入を始めた。とりわけ、国内外で激しい議論を巻き起こしたのが、11 年 1 月施行のメディア法だ。

主な内容は、規制機関「国家メディア・情報通信庁」の下にある「メディア評議会」が、新聞やテレビ、ラジオなどの報道内容について、①バランスを欠いている ②民族、宗教、マイノリティーの尊厳を傷つける——などと判断した場合、メディアに罰金を科すというもの。

国内の報道機関は猛反発し、欧州委員会や欧州議会などから EU の基本理念である報道や表現の自由を脅かしかねないとの批判が相次いだ。

ハンガリー政府は、外国籍メディアを適用対象から除外するなどしたが、微修正にとどまった。

リベラル系の全国紙「ネーブサバッチャーグ」は当時、新聞の 1 面全面を

23 カ国語で表記された「ハンガリーの報道の自由は失われた」の文言で埋め尽くし、抗議の意思を表明した。

現在の編集長、ムラニ・アンドラーシュさん (41) は「政府から直接圧力を受けたことはないが、政府系の広告が明らかに減り、収益に影響している」と話す。さらに「公共放送で政府批判が報じられなくなった」とも。例えば新憲法の施行直後の 12 年 1 月、ブダペスト市内で数万人規模の抗議デモがあったが、ご

く小さな扱いだっただという。オルバン政権に批判的なラジオ局「クラブラジオ」に周波数が割り当てられな  
いという問題も起きた。クラブラジオ潰しではとの批判が高まった。

クラブラジオ側が裁判で勝訴し、現在は別の周波数で放送を続けている。

同社を経営するアト・アンドラーシュさん(63)は「広告収入は激減したが、基金を作って1万5千人  
の市民が寄付で支えてくれている。我々は決してコントロールされない」と話した。